ル 4
4599
1

門 No. 4
號 4599
卷 1

早稲田大學圖書館
昭和 35. 1 28 受
藏書

平

早稲田大學圖書

伊勢參宮名所圖會卷之二

目録

野路玉川　草津驛　栗の化石　立木明神　栗太郡　明神　牧多　大芳　新田　月瀧池
鞍嵩八幡　岡村　灰塚山　善光寺　石部驛　古墳　古堀の社　落合川　里夏見　吉永　三雲　山夏見の田川
岡川　洵　手原　小野　上野　林　馬場　若宮　水口驛
栗太郡　旧野　栗太樹　老上川　玉水の池　乳母が餅　常善寺　坊袋　三上山　揚山　伊勢落　金ゝ　阿星山　東寺　西寺　横田川　梵字の碑　鳥帽子碑　大宮社
勢田驛　樫原　山田天橋　草津川　下新屋敷　川面　旧池　梅の木　是齋　甲賀郡　旧三郡五郷　拂子袋　平松　泉　北脇　林口　大德寺

早稲田大學圖書

大国寺　小城山
栗林。彩城。小里
狐形石。岩神
今在家
大野。德原　市場。荒野
田村明神　田村川
猪鼻　山中。聚楽寺
鈴鹿山。三神山。坂本。田村社
橋弁天　伊勢海硯
金藏院　小女溪
常掛　橋本
權現山　四彩茶屋
茶渦淵　一瀬日川
御影嫂塚　清見原天皇陵

正源寺
稲川。清泉里
金毛院
松尾　松尾川
田尻野。猪鹿明神
榎。澤
鈴鹿社日蛇宮
岩窟觀音
法安寺
一里山
筆捨山
大黒石。惠比須石
長柄石。ろくび石
鈴鹿関跡

布引山
瀧樹明神社。往伝川
今宮
土山駅。一里山
解脱坂。蟹塚
紅洲境
鈴鹿川
坂下驛
燒地藏
朝日弁天
羽黒山。奇石
関驛
関地藏日開眼法

五そ橋
和琴橋
追分
天神社日森
片淵城跡
土岐百塚
空也堂
一身田高田專修寺
大乃己所神社

久我白石明神
川上瑞光寺
関川
観音堂
高野尾
窪田
坂部
身田高田專修寺
大部田

城跡
湯津盤日森
清岸山福藏寺
古驛
中縄
豊久野　砂掛松
光明山安養寺
例幾測齋塚
三彩茅屋
小丹浦

三日城
楠原
椋本
野寄
六大院
一の宮
中野

風雅集
貞享
東海道
長橋
蕪盛

五月雨
瀬田乃

勢田橋　大橋長六十間幅七間　小橋長九七間幅四間　中島の間十五間合長百九十六間　志賀笑栗本の境に流る

長橋唐橋又くゝ橋きのこと　近江　国中に水こゝかくを湖に入て其末流爰に聚つ

宇治川を経て淀川に入る橋の畳鰐未詳

或説に推古天皇元年壬申夏百海化来の者に献く長くこゝ谷川の流を知りて橋を渡を工あり

部本曾根其余百八十橋を造しむ時のへこれを造ること始る橋なりより此舟よりや造り始め

ゝ憲日堂の秘抄に又ゝ渚将進至淀田帝悲衆陣橋西徹拔拒之。此舟既に拔橋あり」とゝ

或書云後一条院の寛元年に焼亡と其後宇多院弘安年中忍性律師造之。又日廿三帝　寛文八年

二川橋の橋二年自焼る

樓の板も苔むす年ふりて久しく代々の武代をならんせたの長橋　匡房

勢田頓宮の舊跡　勢田赤洋これ敏宮都を出てこの不の頓宮に入らせ給ひ御願の櫛をぬき

源氏抄　大ねいとにてれ物かさねらるゝ花多余情うはべ

ふりにてく久しの紀もも絶の川やそせれ波の神なとしや。

勢田古戦場　大秀の宮つる軍やぶれてくろうゝ敗て後鳥羽院宇治勢田

の橋に落て軍士の橋に落て後の後人迂一奉る兼久記。中納言知盛源氏と戦此所

○勢田城　跡川の東にあり山岡美作入道乃阿弥城主

○勢田鰻　鯉　鮒　の数名産多し

栗太郡　勢田川より東を云　苔山地に栗の大木あり因て郡名とす

今首物語云むかし近江国栗太郡に其後朝より丹波国瓜坊ゆかりの人栗の国を領ふ

栗の木びくろくるかるかるひゆくべ〜其後朝より丹波国瓜坊ゆかりの人栗の国を領ふ

霹靂大風にも不動ちろる間其国の志賀笑栗太甲賀三郡の百姓共本の苗を植て耕

たゝ〜これふりて百姓名此苗を奏〜多〜ちろ則採宇の宿孫名代ちろ〜代例

今其後考錄ちろ其所の百姓のゐ孫今に其郡とあり

此物ゐろに八枝の本くゝりさんぐ大木其地ゐみをなて郡名と号るゆその例

和漢もあるゐ栗の葉あ〜ゐ栗と

もつ拾ひ〜なるべ〜今にも其葉成城ゐるゆあり里人これをスクモとゐ

栗太里　名所集　名所ゐ名ゐ名ゐ名

平治物語頼朝遠流の条下白盛等
大法師とりたびの人々さびゆりめる上
せこんの橋もあるてあにてひろの坂へ
こうり給へ所ゑ〻くてお送り
なるこの社のこんくる紙つくる神
そこ〻へ〻すけべ明神より佐殿
さこんを後ハ法前を通参して
り給のゆりとも上こんこそ
まりるひろ後ゆけ人ちづ
まりて盛安ト名ハ法ゆそ
ちゆ出かゆるべうこうる上ト
せーハ不思議の者と者とおり
ゆ也ハ君ハ　やうあして
八幡ゆりて大法こ座を
盛安ゆ供して石巻の上ゆ
伺ゆ者ゆして十二斗の童
子ゆ弓箭とりゆて大法こ

世法こ大武勇が弓
やあらびひて参り
ゆとやれ
ゆ御武殿の
内ようけたる
御参ふて源く
ゆさめをけ後より
狩ゆるゆんどるを
見ゆ狩ゆ人ゆ世よく伝
らるハ主ゆ狩ゆ御
者ゆ安ゆ者ゆ仲ゆんと見
なれハ打あらびゆ狩ゆ中男
をれゆ者ゆ伝らゆ義ゆて
[illegible]
ゆ[illegible]を西方の[illegible]
押ゆうて大ゆ[illegible]ゆ三ゆま
りてゆ者ゆて盛安ゆ狩ゆ
世法ハを懐中ゆ入ゆ
なれゆハ

名所

野路玉川

日本六つの玉川の其一つ也。此ところ名所なり。野路の玉川とは、野路の郷の内にあり。玉水の池街道の右にあり。程本原

名所

草津驛

此駅中より中山道・東海道の追分あり。即標石を立つ。

旧事記 二見山

○案孔四月中午日と古い大社とゝろぐ。大菅新田 ○月の輪池村の入口あり。

老上川

○鴨の宮 濁の池の中にあり。

十首

草津より濱へ出さうとかやめいく所志賀はしり舟 為尹

乳母餅

新建英蘭にして、且玄濱樂と名付賞し人の餅のすき実い圖の傳と記す。

○乳母が餅の形を標石の矢橋の船場まで北へ町と記せり。即家の傳なるあり。

山田矢橋の船場

何とも草はろへいしの

石場より

船にて渡るべ五十町の海上に山田の渡

いろ〻の物を渡す

絵景つくん方已賜布の船

堀百首

みなとてるや矢橋の渡をもるあとをいくそうひくせてみ 橋守 兼昌

鞭崎八幡宮

矢橋町の傍にあり。

祭祀三座中に神功皇后左に住吉右に高良也

天武天皇白鳳四年 大中臣清麿勅請之傳曰建久元年十月二日頼朝

上洛之時此祠前を過る付馬上にて敬をなしてこゝを通る祢ぞ浦人丸

乳母ゞ解

むかし一近江源氏の二流佐々木左九郎高頼義賢と云ふ
永禄十二年九月信長を恐れ甚だ泳尚のうりて寛永
の頃まで郷代官のおやりのおそれありしが其より
せらるゝ付幼四三歳ゟ老ゟ最期ゟ縁んで其の乳母と
ゝ
こもるゝ用意一ぬ乳母ゟ一ゟ弄ひ一其ゟ抱き養戸の
教ゟ
能ゟ
ゟ
ゟ

矢橋の

拾遺集月の夜舟とよみ
物語に「むら〜湖水に
舟なりしく浦海なり
しかは舟の出来る由
歌に志賀の浦なりし月
にはかに水みなぎる波の
うへにうかびたりわ〜く
題ひとり男ある夜波
に流れてなきかなしむる
伝にこうつ〜もん我ハ心田
丑年種うゑ捕の丑年
ちうるが其本と切て
舟に造り湖水
のいとひぜんこ有の
字より流るあと切
べ〜と空りぬ流れも
其舟をかへうてもいろ
でうこ〜ほど其舟なり

脇内に弱〜しく男
を石の字と見し船ば
舟ハ矢橋べ〜と
其綱をとゝ〜ふ〜〜法
永命ふ〜ふ三て扇ハて
さし拾ひ忍ち舟ハ見
ゑべ〜と恐怖のゆひと切
ゆ〜〜ゆきけ〜て矢橋あん
の如く舟の勢さんば中一のき
ふいひ出く其わわ紙
とげうりとそ

計拾遺三十五の歌に曰
矢橋の浦〜舟の夜の夢
人まくさも月のさとづ
自ら 舟もころれ出〜ん
と志賀の浦〜くの戯作
いろ〜さんも一場の夢
体人の

易祿移八幡宮のうへ菩ふ大將急き馬ようりて偈伊あるられ国
て鞍傳とつ〻りとゝ　○樓るゝ鞍い若ゝく造るゞ石制之茅はの叙着ゝう鞍を制して造
ところひ合ゝれば昔此地ゝ法ゝ石ゝ若ゝ樹ゝ又神ゝ之ゝ本明神ゝとゝ八ゝ毛ゝ又ゝ若ゝ蔓ゝと神ゝの樹ゝとゝ
の茅ゝ石ゝ茅津屋ゝ竹の根ゝ有ゝて緑ゝ神ゝ木ゝ〻ゝ　フヂブチ　同訓ゝ石ゝ物ゝこブチ
立本社れの辻ゝ正一位立本大明神の額ゝ若ゝ石ゝ之ゝ樹ゝとゝ春日明神
を祭ゝ神ゝに附ゝ神ゝに附ゝ足御中の掘ゝて良ゝ妙氏の分際をお明ゝを
附　寿九光廣の年譜記云やそ〻茅津と通ゝふゝの通ゝ家ゝ白ゝひゝ石ゝ毛ゝて〻本浦ゝ森
ゝ里人ゝ図ゝ毛ゝ日勅請ゝ〻ゝと

神もまこゝろゝくゝとさしてまがゆゝん毛も毛日社森ゝこゝそゝけ

○私ゝ白此地の訳舎ゝ若ゝ茅ゝ甚ゝ　ゝ甚ゝ毛ゝ十三ゝ毛ゝ　ゝ若ゝ茅ゝ屋ゝ孫ゝ
此ゝ若ゝの縁ゝ　ゝ根ゝ若ゝ　ゝ姓ゝ　ゝ
・家ゝに根ゝ若ゝ　ゝ化ゝ石ゝ　ゝ毛ゝ栗ゝ　ゝ那ゝ栗ゝ　ゝ大ゝ　ゝ亞ゝ相ゝ中ゝ山ゝ君ゝ　ゝ記ゝ
黄門日野君の縁を結ゝ

表

裏

化石之譜見殆邪代碑編湖東石亭所録之雲根志呂類有数属者近江國栗太郡
草津驛舍長駒井某者持栗樹化石来而乞其名且記之方今獲審親之其高一尺
餘斧削痕存而不煩琱琢自然成置崖層嵯之形峭壁攢峰之勢尤足愛翫雪淵明栗
里碑石之名何若栗本栗石之奇不啻慨目而適心而已不響不崩永世宝傳應爲
一郡之霊鎮矣今名之以活人之享蓋栗子其功是以活人石文宜襲其德捨無
窮因書以還之云

寛政甲寅晩秋　　前權大納言藤原愛親

○近江國栗太郡くりの化石を

そのくにさくらのむらに本いまかりて受くしたりけれ　從一位資愛

常善寺　由緒有寺之縁記略之

草津川　村ゝ之ゝ。下新屋敷。岡村　統ゝ本高　牧の墳ゝ。目川。坊袋。川面

川ゝ井池　右の方

陰ゝ　ゝ　ゝ　

左本若海乃中仙
末社
末社
立本大明神

草津
立本大明神
拝殿
末社

三上山　一名繖松ふくもしつ
俗山桜山ともいふ
益須郡にあり　この山の
右まよ見ゆる山形美麗
ふもとの人家ふもとにつく絶景
いんかさかうー似て三上山の
頂上三つ峯わりてうつよ
似たり
附会伊勢物語七ケの大和と
哥書よーほ尾とハこの
三上山ハ天名之其ふもと
うに似うれんがうろ
赤人哥
さゞ浪の三上のやま
海うれや
月よさし彩
塩尾のやま
今按ふ哥をりて其後
ともろいハよ〳〵ゆゑつ
ふーそふよ此哥ふでを

ちなりふとふるふ
てふれとふもの似ふ
後人の似ふ
このふ家なるべし
赤人ふふも光栄は
七ケの大和哥ふ

富士御覧の記
ゆりの上
富士のね
遠き
似を
をく
三上の
ふのた叶雲　光善法印
三上山

三上社　蒲の三上
村まあり
祭神大河影命　遠宮の
夜先い
尾釜じ炊ち陶器也。倉ム

梅の本　六地蔵村と菅大かう梅の本のあ茶屋あり

墨齋　和中散　元狐津田宗右衛門　賣始めしこと医書に和中散の名い[illegible]

世業に和方にして医書を[illegible]

和中散本店の侍るとぞ[illegible]

[illegible]

九品山善光寺　油薬　赤澤

○上野　○林　○伊勢落　○金山

甲賀郡　[illegible]

石部驛　後のとがいえのらくらく

万葉　白檀石邊山常石有命哉憲下居

○代匠記曰古今集に[illegible]

[illegible]

月川

[illegible]

梅の木

色若竹緑
葉よ
あつまの
清香を
愛でる
むめの木は
栄うり

信海

新勅撰夏

夏衣ゆくてもすゝしく捧ちいそ人のふるの松のしら風　家隆

石部社　石部の町の延喜式無塩上神社甲賀郡八坪の内上の社に吉姫大明神下社に吉彦大明神を祭る世記曰倭姫命阿佐加潟を渡りおそうまとる紀多奈連ホが祖宇賀彦ゴ多吉比女吉彦二人参りあひき其ゴ吉姫地に御田帯ミ麻園を敕ゴるとゴ久うり国て来宮に由縁ある社なり　啓蒙

落合川　白雉川ともつゝ。東の村西の村の境を流れあり此あたりを落合川　長寛元年宗山門の寺院基を武天皇建立佐和天皇再建此寺開基ゴ

▲阿星山東寺　の後基武天皇建立佐和天皇常楽寺ゴの寺院ゴ

▲阿星山西寺　西寺に正月十八日東寺に正月廿四日なり鬼儀の面芸至武の市代より傳りて其古ゴ

其教ゴ　常楽ゴ　堪ゴ

柑子袋　○平松村　此村の右の方のゴ

針村　入口の小川針川とゴ名不なり。松茸集ゴ俳勢國の名石とゴ

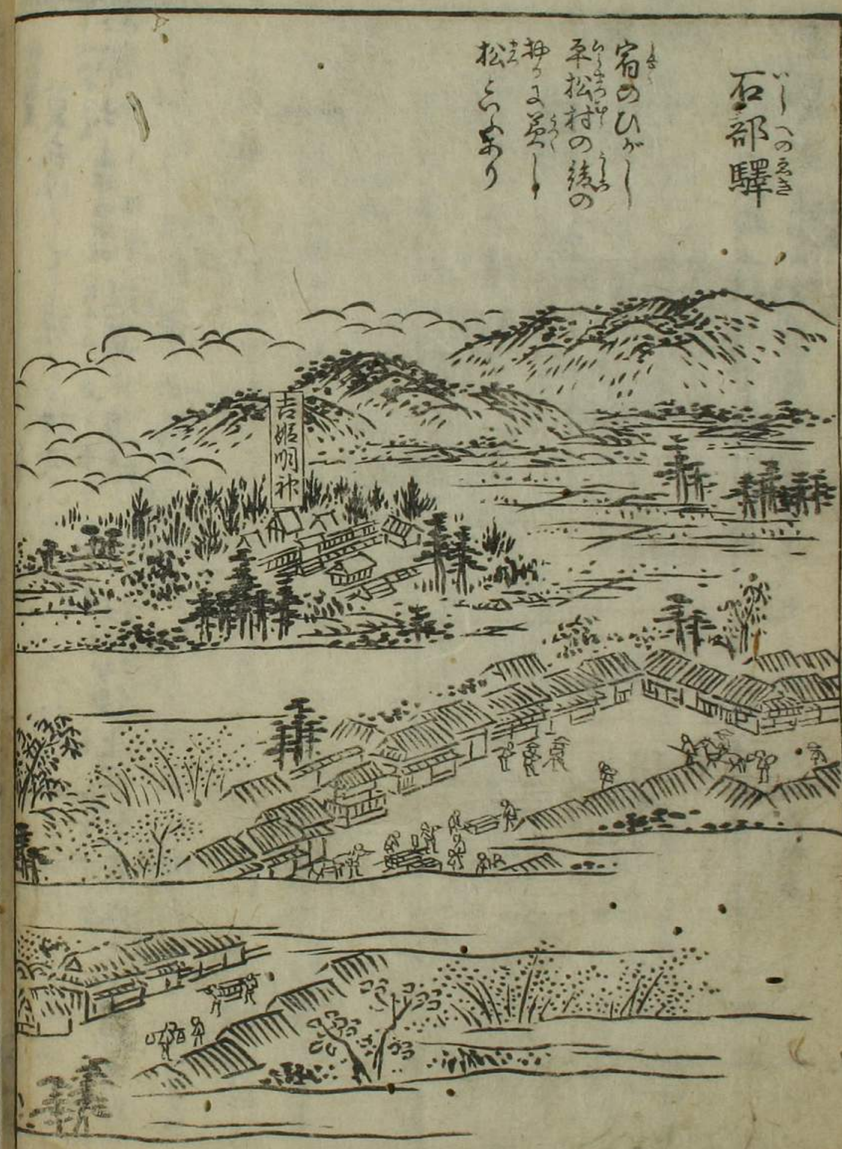
家集

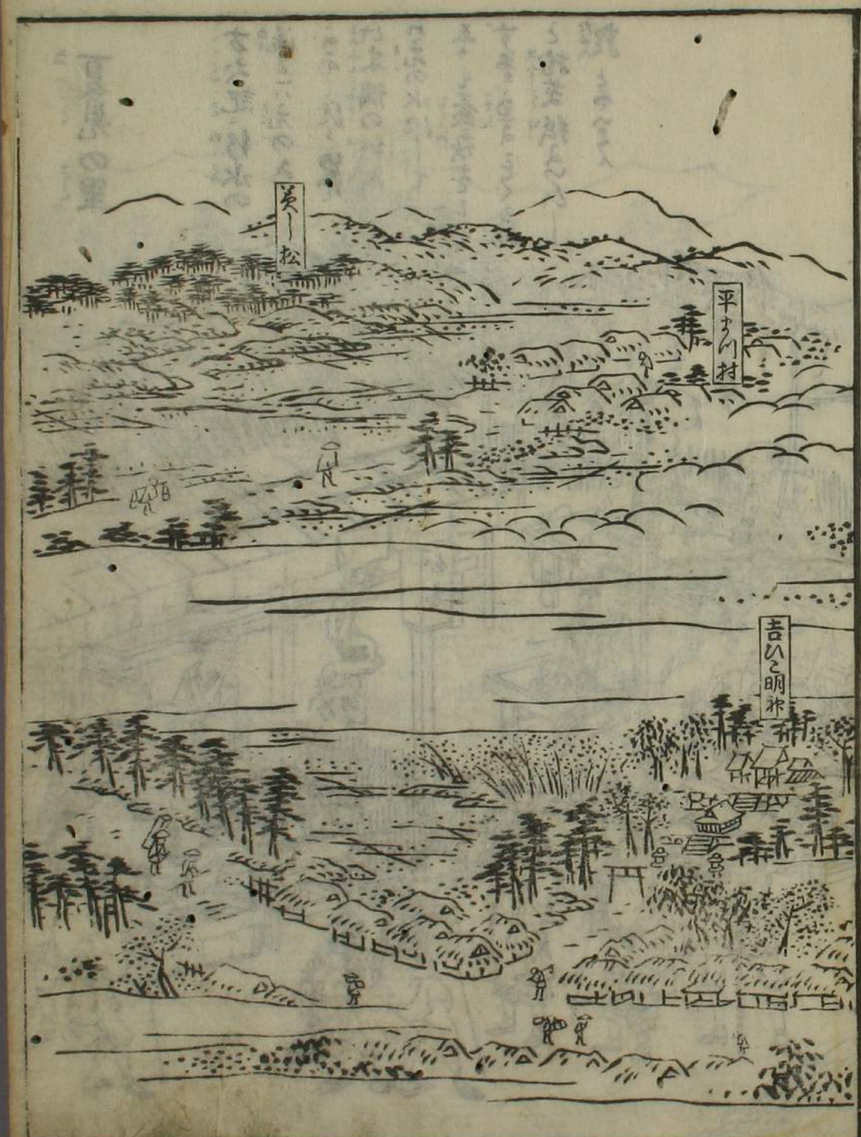
かゝ衣ぬゴ針川の青柳の糸ゴ　貞恒

里夏身　近江ゴ琵琶の浦とゴ名不あり但し此ゴの名後ゴ　主詠

石部驛

宿のひがし
平松村の後の
神ようの美しき
松ばやし





二本松

夏見の里
方丈記に紀水の流さいハ元のみなかしらとハ
けん水偶の紀水いえの水にして
玉ゐも蓋茨をとゝそ
ずまゞ迄ことくろ掛
と松茂紙ゆひ
船とゝいえん
かち

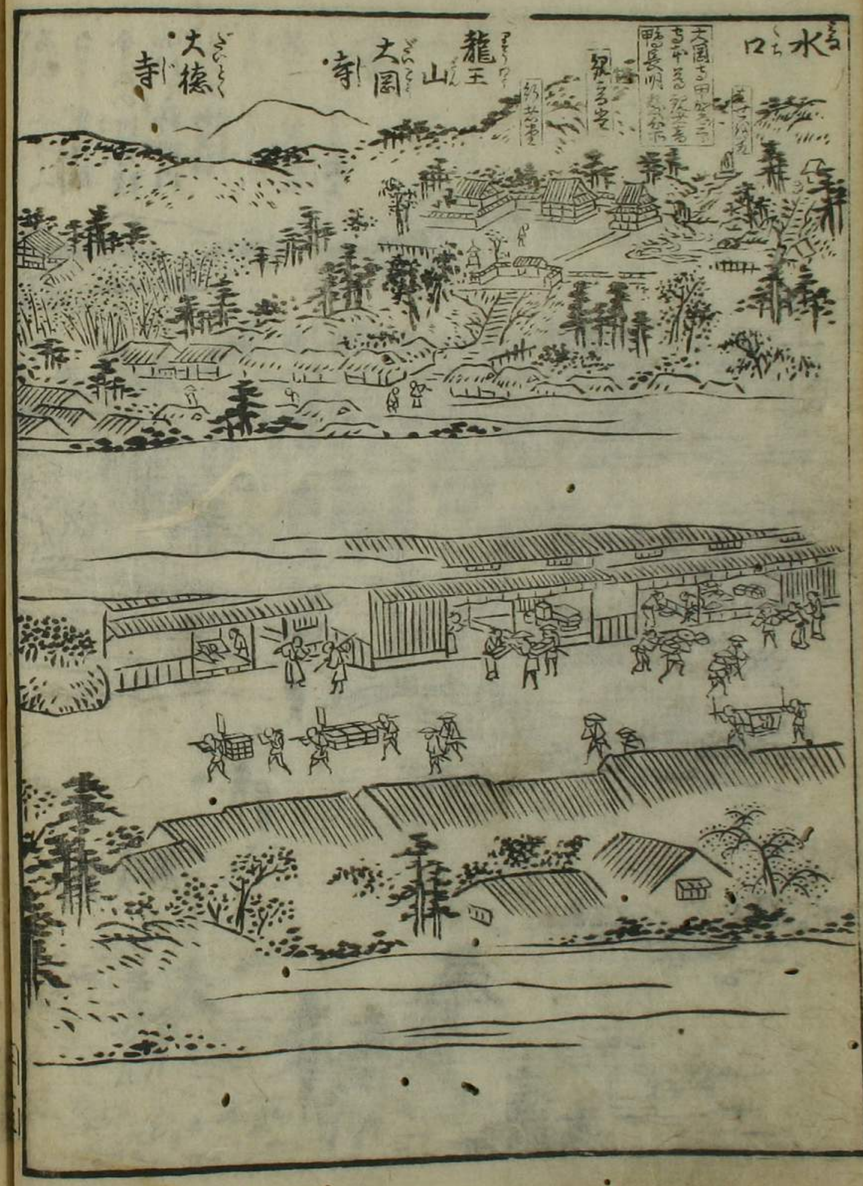
横田川

一名石郡川原

横田川石郡
川原の蓬生
秋風さむし
くやこ
長明

源は甲斐郡
大河原の山谷
より出て古屋の
東小へ出松尾川
と合し西南へ
流れて酒人村の
東西にて鮭田川
と合し横田川
と合し南へ
又西小へ出る

石郡の小へ
栗太郡
金山の近辺
小にて野洲川
となる川勢強
これより小西へ
流れ矢村の
へ入る



甲賀三郎
兼家上文
郡名の初
記せるごと

長明総忠
の子孝古
今集の撰者
あるひは十訓
抄をかくるあり
大原らに入て
僧となり
蓮胤と改む

山夏身　此石橋川の名酒又は李とも又名古を偽る案屋多し甚無益なり

吉永　○三雲村　江南六角氏の城跡三雲の玉馬之助

○田川　小川あり横田川西の岸あり

横田川　土橋あり○西の方より山あり○横田より小川の西上へ出る川を右へ

○横田字出石　○烏帽子岩　あり

泉村

光廣卿道の記に泉とあるそ

夏の日はゆくてよぬるき風よりも泉とあいとしるるかな

北脇　宮の内に八幡　○林口　○馬場先　南の方に金傍山飯道寺あり岩本院と云

○八幡宮社　水口本戸の外に林口と云ふ山あり俗に村三神と云

水口驛　水口山蓮花寺

大宮社　城下の西　○大徳寺　禅宗之細画の上あり　○龍王山大岡寺　之細画の上あり

城山　大岩長の比長柴大岩少補新る不方ナリ　○吳濱郡天神　茂秀之原宮卿と港と兼て

布引山　水口より出口なる所なる山三里ヶ間岩にて低く流れ布と成るなり

名寄

風ふく雲のたえてはぬきとうもいとゆる布引の山　長明

栗林　○新城　○小里　○外形岩　○岩神　○今在家

岩神

祠ありて岩を祭る

人生れしるる

山岩の形

地きしるく

人よ後にて其

るの名紙宮

を作りせり

山あり大石寄石

里人り問る

右の方に川あり

あり上に出る

出る横田川へ流れ入る

重治書失此行以前無見

洞者洞也
備書之失

稲川○山口志兵衛重成清泉碑 稲川の古橋を渡て左の方へ九三丁斗の石垣の内へ清水あり其上へ石碑を建る 文曰

山口志兵衛重成者勢州之人也本性住山氏初名盛治號三左衛門其父甚左衛門吉久仕飛彈守蒲生氏郷領鈴鹿郡住山村聚小川左京女生一女三男長曰内記也盛治者其弟也氏郷移封奥州吉久亦從之盛治及十八歲來江府事修理亮山口重政慶長十八年重政及嫡子伊豆守重信右故件首竄于武州入間郡生越龍穩寺重治辛勤竭力奉之元和元年攝州難波戰重政重信屬掃部頭井伊直孝下攻之河州若江重信一番合鎗先獲首級其身亦被瘡冠兵進至盛治從其役與同僚兩三人擊退來屬重信歸陣重信得免既而没重政嘆盛治戰功踐跡示感書畀山口氏及其諱字且授家紋於是盛治改稱山口志兵衛重成乱平之後重政赴高野山欲至南海使盛治事雅樂頭酒井忠世寛永五年遇赦歸江府仕幕下采邑依舊同七年重成歸仕重政同十二年重政易簀次男修理亮弘隆嗣其家重成勤仕如故正保四年弘隆奉台命守沢州水口城重成從行水口土山之間水之行人苦渴重成聞山麓清泉湧出盛夏不涸掘井干稲川畔石爲甃大爲行旅之便兼應三年五月十六日重成病死年六十九號即翁了心其後經年土崩石傾其子志兵衛重主頃間追其志畢修覆之功依价者請記父之履歷固辭弗措乃述其大槩作一絶示之

從役難波揚勇名　稲川療渴本源亨
清泉日夜流無盡　洗出忠心一寸誠

延宝巳未冬

整宇主人春常法眼林重民識
孝子山口志兵衛尉重主建之

金毛院 光子内親王御筆の額あり

龍樹大明神 御殿の後ろ右の方へ入る 伊佐地○今宿○大野○徳原○市場 伊場共云○前野

松の尾村 右の山上又松尾大明神の社あり 毎年12月上の酉の日祭ず ○松尾川 一名狐の白川

古山驛 西の入口多賀 ○一里山○幾理野 元亡の出る所 人の通ふ所 切掛彫あり 用きしるる道 其根の残りてあり 足い松村の不公

田村大明神の社 村の出口又多明の名居 坂上田村丸の霊を祭る 別當あり 神宮寺

正一位田村大明神と額あり 右の後二位田村丸の男大嵐の孫剛勇衆に秀て其名聞遠の味を慕る又是より奥紙を塗代て其霊を祭る 彼四郎長仲成を射る 夏冬棚一間猫を妻がよく ○清水山道 勇名を顕て雷はせり 盜を禁して綱の天下に

業薬 して山城栗栖野に葬る 今も其墓あり 多又十口

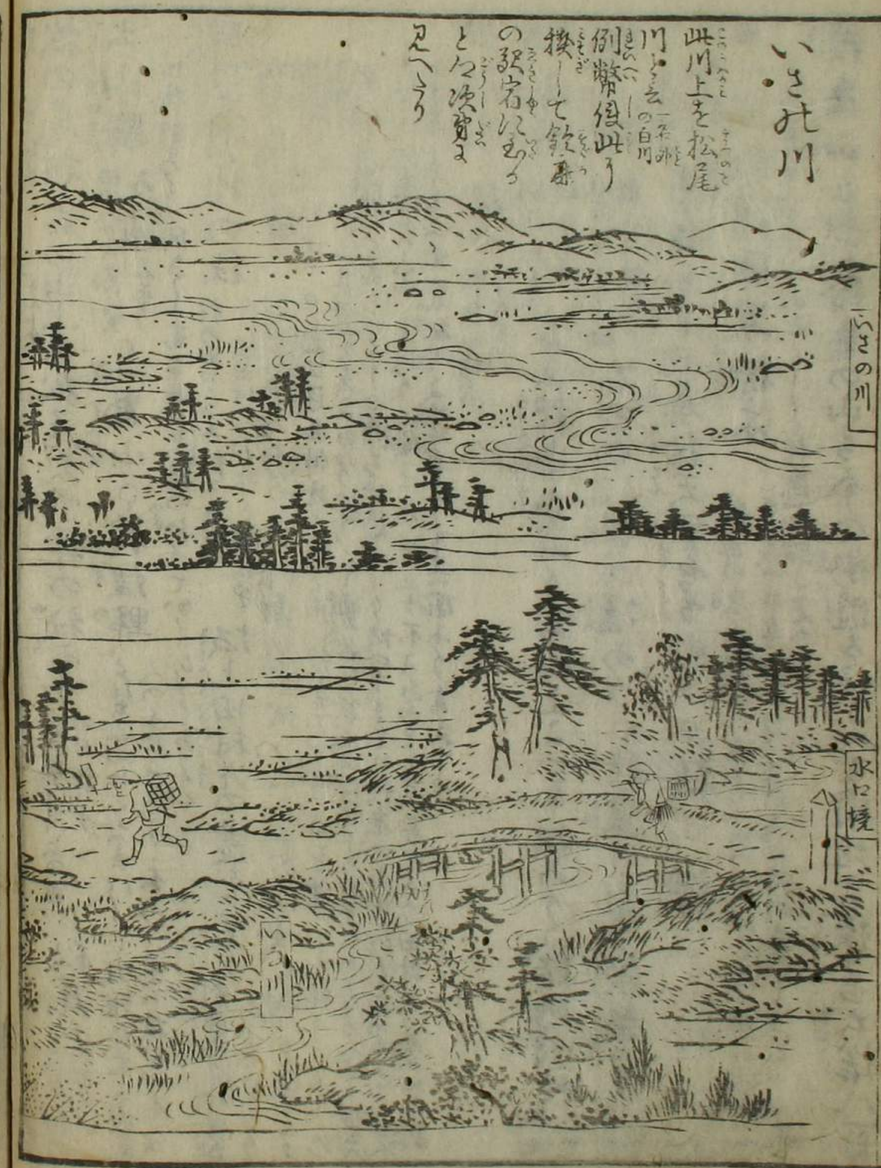
田村川 橋あり 明神の後ろ 一名白川

田尻野 御殿の左右の神宮 右又観音堂あり 其山上又一本松あり ○猪俣明神 猪俣九郎

蟹ケ坂 地名中世の細道上又記せり 右の谷に蟹の塔あり ○猪鼻 ○山中 聚楽寺 老人弘親

▲江州勢州國界標木 紀伊の国の坂切川を下へ入る迄の国境 永十二年の比より今のおくへと紀伊郡賜よりたんさう

鈴鹿山 をへて鈴鹿の山を今の御道を挟んで南北又聳四方八百


いさみ川
此川上を松尾川と云一名白川例幣使此り換して飲料の設有しもの
と今決定す
足へうり
いさみの川
水口境

山口清水碑記

土山
さのみてらく
終雨の曇る間の
去ん
なのめうろ
此風絮しぶく坂とうへ
ゆづ坂の下れゆうに物もい
まうく其茅後を考ろよ
終庶坂の下の間ゆ去ん
ゆ〜されば
百年の
星霜
と経
が其ん
理の模
を改む
るゆを
ちゞ
今拾ゆ
むらしの
街ろ
へ今ろ
遠い
て名おゆど
も異ろよ
ゆ今茅
と松尾この
山の方ミ松宮
村ゆえの茅ゆ
て敬宮の
焼宮ゆ山ゆ
松宮の山ゆ大ゆろ
坂の元を坂ゆ
こくとれて
考合もべ

八谷ゝ〻玲瓏宮道の間凡廿六町往古も山城守治より伊賀名張を経て伊勢に入る其ゝ此ゝの内長岑ゝふを経えう今の社より二所社樵夫山の細道也足古ゝみゝふの中ゝ

秋宮新集

ちぐうゝ山ふるの中ゝ君ようもきるゝをまこそおれゝゝ

○平城天皇大同二年逆賊玲瓏ゝ籠ゝ族人を悩ゝの禁廷に訴ふ勅ゝ因て田村丸これを誅又弘仁年中ゝ上皇と此ゝ遊ゝ其後延喜七年九月捕鈴鹿山群盗其張本十六人誅之 昔ハ樹木茂少れが山麓本宮の栖白波絹林濃ゝ

後撰集

ちぐうゝ山いせ紙の白ゝ丹捨衣塩なれうゝと人やつゝん

三神山 鈴鹿三ゝ山 昔を古名片山ゝて三神 番匠の地人 伊勢の新人此ゝの雲のさどまんをゝて日和とゝ

坂本村 此ほゝうに鈴鹿川橋あり洪水已後ゝの根を古町ゝふ

田村社 鈴鹿の田村将軍の霊を祭ゝ

めぐゝし石 昔ゝ鈴鹿の山神いまゝ安永二月八日猪出縄を張て人を不考愛宕出現乃地ゝ境内の白ゝの社を鈴鹿姫の霊ゝ

○たつうゝ坂 ちぐうゝ山の坂の名ゝのゝ八丁

社ゝれい神ゝ 本殿天照皇大神荒魂瀧津姫尊氣吹戸主尊速佐須良姫尊相殿にく座を後ゝ倭姫命と合祭して別宮を片山神社ゝ縣主の神社ゝ

○鈴鹿神社

の末宮にも此頓宮身曽貴殿ゝ地ゝ歯対の境内ゝ八丁ゝ鈴の内方ゝ末うゝ此神ゝの末ゝ摂ゝ此不ゝ社宮身曽貴殿ゝ

○頓宮 秋宮群分の鈴鹿の新宮ゝ

新勅撰集

いちくゝとも名ゝいふ田ゝん族濃とる苔の白ゝ穂の玉葉ちり〻〻

通俊

○ちぐう川 新元集 八月毎の日をうるまにてちぐう川八十瀬の波ゝ白ゝまるちり

皇太后宮 治部卿

○橋の希天 希ゝ伊勢の海の硯の

多武峯密蜜日記 昔遠国鈴鹿の橋板にてつくりなる共橋板のうゝ共ゝ鈴鹿ゝ

の社ゝ地ゝ共ゝ橋ゝ板ゝ希ゝ天ゝ帝の宝物ゝ

の社ゝ地ゝ共ゝ橋ゝ板ゝ希ゝ天ゝ帝の宝物ゝ

いよ〻〻おうゝ白ゝ本造の具九ゝ白ゝ人ゝ合せ鈴鹿の玉ゝ丹つけて鈴鹿ゝ

牧宮寺ゝ白ゝ人ゝ合せ鈴鹿の玉ゝ丹つけて鈴鹿ゝ

ちぐうゝ坂の下ゝ白ゝ不ゝ橋板の希ゝ天ゝ

田村丸 誅仲成

加茂皇太神宮祭記云
淳和天皇
弘仁元年
左上平城
天皇藥子
の怨しまつひ
に仲成ぶかメ
よりく御修
復らんがる都
を迁んとを是
よりて勅みて諸関と
ゆくゆ田村丸を大納言
とゝして禁中を守らしむ

上皇大よ怒りて畿内
紀伊の兵士を召しく
藥子と日興して関東
に赴き給ふを又
田村丸と大ねと
しく文屋綿丸を
副將として御幸とと
ゝむ田村丸身の大る力を
に抜ぬと源く加茂明
神と称し即鈴鹿の関と
これと遮る此を抜ひて大
陣戦ひるふ彼神力の加
りなるおや数多の軍兵
ひ勢く計し現じて逐て
仲成を射殺し上皇を
宮と還し奉るとゝ
後世田村の謡に清水の観音佛力を
蒙仕せしかるのるけよゝ

本社
秋葉遥拝
大井宮
田村川

田村大明神社

まろありやがてひらせてくおがむよよのつゝの布多天ふかわしまが[illegible]
又日蓋もぐろの王ハ伊勢又伊勢ひしゝが経廉の石橋にて俗にいふ硯を直す伊勢の海とこれ
せ弱ひしゝ其うさら今ゝ経廉の社又あり名ハかゝるのゆゑとき世よりでさたりめりうゝ云

橋の布天ハ一里塚の東の橋なりしあり 尚図の裏のこゝの記

○岩窟 尤其の方又大きなる瓜切ぬき自然の石堂にちうゝひ内ゝ阿弥陀観音地蔵
を安置ゝ其めくゝらゝ法泉寺ゝ落る流ゝ法瀑の親まと称ス

坂の下驛 いろゝへの経廉の山の林廉にゝ流坂の下とゝ称るゝ慶安三年
九月二日の法水にて山川田畑民屋ことゝ〳〵く頽廃を依之公ゝ修補と
加へられ十町斗東へ岩をうゝさと今の坂の下是ゝ古名是を鈴廉の驛ゝ云

金瘋院 仁壽年中慈覺大師の開基鈴廉山護国寺ゝ日光の末寺

本尊ハ薬師如来 脇中ゝ傳教大師感得の三寸八分ゝ尊像腹籠云
経廉の林廉にゝ[illegible]法あり[illegible]

小女溪 官道ゝ橋二つあり橋名月ゝ驛の中ゝ[illegible]と東の端とにあり

法安寺 禅宗にて石佛庚申の像あり 石工迫國の名作なり 焼地蔵

櫓の木 一里山 朝日布天祠

權現山 [illegible]の名ゝあり云石垣のうゝあり今地の字にて結[illegible]
[illegible]あり名付ゝ[illegible]経廉郡誌ゝあり

四軒茶屋

解出が坂

世傳云昔此谷ハ山賊埋
大なる解出あり妖
と化て人を捕ゝ
旅僧是ゝ會て
佛経を説ゝ化
て是とあ和ゝ
其塚を築ゝ云

或云昔此谷ハ山賊埋
伏して鬼魅妖怪を
企ゝ一人と威ゝ
物を集ゝ賊と名
て解ゝらひゝ世ゝ
横行ゝ者なりし
なり 日本記土蜘蛛ゝ中
則賊のゝ是同

山中

雅康卿関東街道記

山中とて不にてやすきぎ
とかなまく

よぶこ鳥
それうと
実けば
山中と
老来ちく
なくやうぐいす

道の傍の松よ撫
の中ぐり水あり
爲水にしく花
とよ美し

筆捨山 岩振ふるも元禄年守石法眼持野元信の画図の趣
のよう一説あり又ハ狩野信説ものれる

羽黒山 関の中乃より北所斗小さ岩ふあり組し筆捨山より連る山なり屋
根みを出を一ふ石もいなる大石層重しく潜窟峰石其数を不
知さ虎豹熊羆の栖ともいふべし 巌中に小祠を篭り 則出羽国羽黒山を
た信のつ〳〵権現の勧請なり荷頃信忠信兄弟不和ありて上洛せし時此所にてやすらひ
遥よ本国の羽黒山大権現を祈祷ありしに其験顕れ忽ち宝剣授けしそ

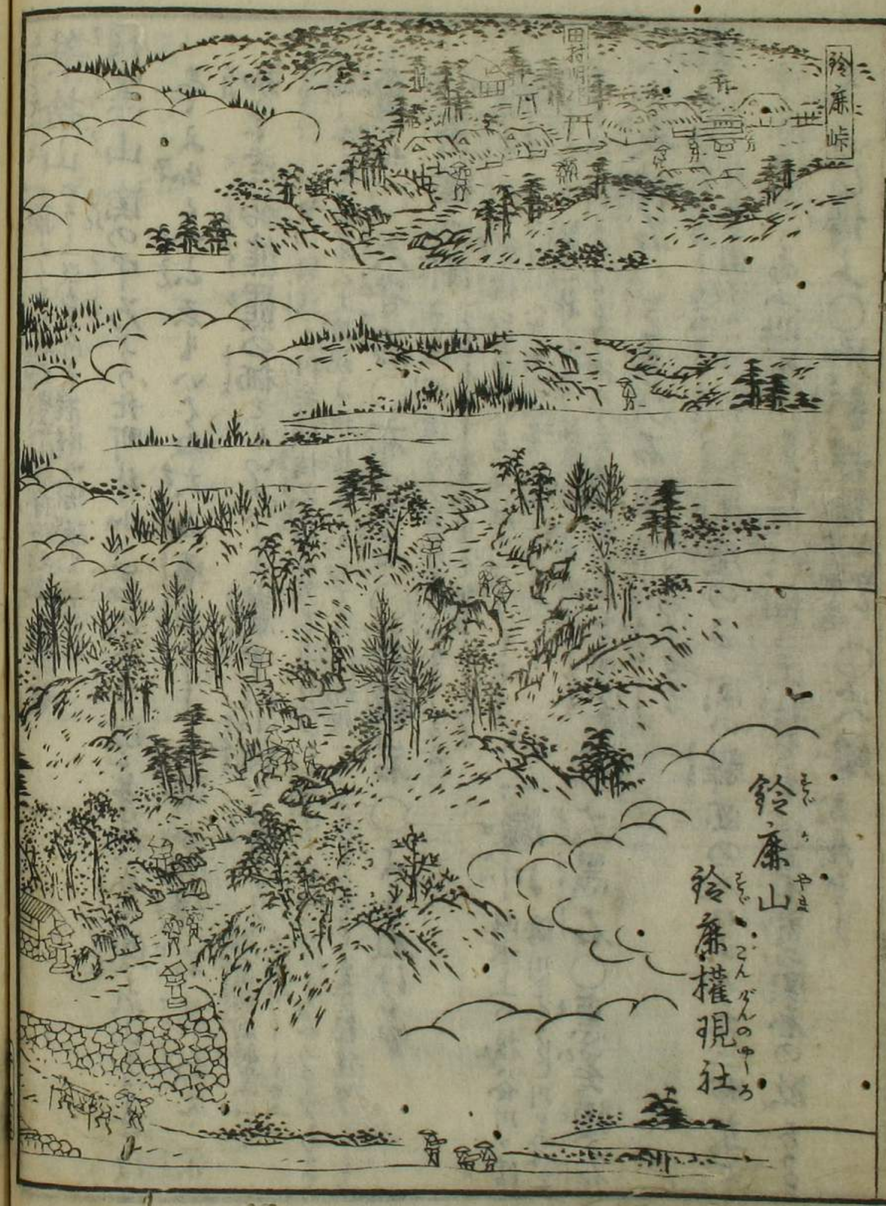
亀石○天守石○布袋石○花瓶岩○よさぬけが淵

○茶端の淵 ふとの深潭あり其外寿石かぞふる
一瀬村 平の盛信の古業に是一の瀬とづくりもあり ○一瀬川 此水上ハ板谷川ノ流
川名なり。尚三神ふより流れ出て八十瀬とも云
来るひとつ〳〵ちりて一瀬川ふ麓伏者川高倉で関川ふ ○大黒石○恵美須石

○長持石○ろろび石 姿の似るのこちり

関 今駅宿の名ともちりれども関屋の関ふ関屋の駅西の入口より二三町東と
中木戸所とふ此不人家の間に細き小路を南へ通る不着の関屋の跡なる
よりひ傳ふ○御影嫁塚 由緒奥より出を ○尖縄 名産なり

毛宮山
大山祇社
玉之屋
滝の川


珍彦峠
鈴彦山
鈴彦權現社

清見原天皇鈴鹿川を渡り給ふの圖

天武天皇大友皇子と
龍蛇吉凶より鹿源
を征て此所に
給ふ鹿伏屋と云い
足へ時は山中は燈
のごとくなるが怒一人の公羽
あらわれて天皇に謁して
我は此山の神大山祇と
案内あ深きは水増を
つくりうゑ給ふ此地のづ
鹿来りて天皇と夏ひ
きりて駅路の路を分て

ぬ困て
給て鹿と号ス
此地をなを
鈴りて
池尖大明神
とゝふなり

江州甲賀
郡にあり

清滝観音
坂の下
古名近素訳

此郷の産物
坂の本獅
坂の弓弦と
て北畠殿具
々の記に見
う
之可鯛鯉
多て漫書之
こ強くと小石
流れく谷川う
おびゝ
ゝなるあの海合

鈴鹿関趾　捨苏抄云　逢坂不破鈴鹿ハ日本の三関なり續日本後記曰

桓武天皇の時始て建後醍醐天皇の御宇に関所停止東海道ハ能撫使等継通し多くは崇神帝聖武帝天武帝の朝よりあまたゝび設置ありしを孝謙帝の仁和二年新道を開られし光孝帝の時より近江より伊勢の鈴鹿へ通路ありしを関所ハ鈴鹿の関ハ上の方よりあり一ハ美濃の下宿のそばなれの川の南より関趾堂ありしを建仁三年水妻殿の寄会長明が記りしなる地名なるべし後の関屋の跡といひ伝へしなり又建仁三年水妻殿の寄会長明が記りしなる孫十二年織田廣信伊勢國の関所を停止とする関宿よりある関所なりし鈴鹿の関と九度郡をつくらるゝ九九関のこゝ號地蔵堂よりのこれり当宿の新城あるひは新所とよぶなり悉領鈴附孫又小松内府重盛公の十八世亀山の城主関安義守盛信武勇をだれる九濃川尤近一益と合戦の時此地を新城を築くとあり甚るなり是亀四年のなりしなり又勢陽府志ハ天正十一年八月末侍ハ新城を築くとあり甚るなり是亀年月地名ハ少一たゞし返て考へるべし

地蔵堂

九関山地蔵院宝蔵寺とゝよ。亀山畧記云真言流開山應宣僧都也若狭白比丘尼八百歳自筆ハ宝蔵ありと宗長紀巳の記るも地名のそばの像ハ紀基の仏とし鈴鹿郡誌ハ天月元年の建立して其後回孫ぢうの堂ハ元孫九年の建立なり勢陽府志ハ地蔵菩薩堂向傳教大師の開基其後文應年中焼失府尊像史獄ぢ一ハ文明年中再興ありしなり此時一体開眼の導師ハ後又回孫ありて元孫九年建立なり勢陽府志

えゞり橋

新後撰集

いせの新路よりもるひて鈴鹿の関を誠るとて

えゞるねこれやをくれ関るゝんうり捨うえ花のうけゝる　定家

筆捨山
本名
岩徑山

此橋い地蔵堂より東町ゞ西南側小橋屋弘法清左衛門のもと其古拙なりとて
エゾとえい初又文字のえぐるゝの言をとりてつひつゝ人うるすれべし〜服部人の杖
とすゝ勢陽府志の説を信じ〜ゞ又西約の拔丈切る跡の拔本より芽を出し〜ゞ

久礼村白石明神 此神もゝ〜小松内大臣重盛公の御子資盛の御ありて此所へ流され
国長門守ゝゝ〜ゝ国の郡司ゝ娘ゝゝ此里ゝゝ其末孫又ゝ又ケ石ゝ城郭を
築ゝ〜ゝ城山ゝゝゝ

同異女用眼の話

一体の関東下向を見うけて彼用眼の
孝師をたのれば一体をば後の
尊像の一隅墓のかたへに佛
のかしらへまくるゝふ候さこそ
用眼ハをしれとそ為ん紙も
見とゝしてゐるうち清しへ人ハ
老をたつぬと思へく水と
ゝ清めなんぢたるうち
其人ハ掛軸つゝく新
てがうち丸うし心なん
いひのゝハ天下の老法師の
教目をゆゝせさびる掛
とゝらしそりゝ紀るゝと
ふみくひゝるゝ句て
ゝうゝ〳〵ゝ老ゝ聖ゝ
あハゝゝ〳〵く彼和尚の
約束ゝ紙

りゝて老ゝく のゝ
をゝひて験ゝゝ
和尚ゝのゝびハ糟糠
を解て老と地義の
前ゝ猩ひ垂ゝて
ゝゝ大ゝる題ゝ動
沖ゝ巳ゝゝ思ゝ
ゝゝゝの考特ゝ
物ゝゝして敷ゝの
おゝくゝ猩ひ
ゝび物怪ゝ長ゝ
ゝくて後和尚体治
の時其ゝまゝひゝ成
解ゝく老ゝゝ
をゝさゝゝけ長ゝ

豊屋和尚之建立郡城之跡考禅寺四ハ関ヲ之寺ト村万松山永明寺の別院なりして境内ニ
関長門守源長関ヲ建の居住ス永明寺焼亡の後此地代官所ニ成ル
又此寺の支院なり永徳年中ニ建の古恩寺あり（天正十一年関宗一関安房守盛信注進状ニ付孫五郎関宗一
建立の古墳あり又天正二十年の古像あり。勢陽府志ニ増光寺ニ川上村ニ関の中町ハ
二所小なり今ハ絶て寺地計なり）

湯津盤村　和名抄ニ見合ヒ尤し今人家多し

見ふく川　けてをむ月のゆつるれむりにけるそやけそ　歌枕名所

湯津盤の森　関沢の東三三所小なり今ハ跡ハ有て小祠の森と
秘とうて小祠村ともいふ

清岸山福蔵寺　竜山墨記ニ拓本西教寺流鐵田三七信者の
香発不易て本尼大塚長吸ハ寺ハ

追分　東海道と東宮道ニ

大名井常夜燈を建立る方東宮道なり

関川　飛橋ハ九十間ハ此橋元弘二年壬辰ニ関本侍村ハ架ル
貞享二年乙丑十二月の定めあり

古驛　村あり　鈴鹿郡賦ニ古厩と云神宮幣馬のやどし所也　俗ニ色井と云名あり

今名を建て宮造りのおくれ
神宮ハ此ハ南村と楠原村との間ニ鈴鹿郡
水ハ月郡福徳村の
山裏ハ

○楠原村　此村の東小川あり

○天神社　此村ニ延喜式鈴鹿郡十九座の中志

波加支神社と云ハ是なり

林　古名松葉　明應中林城中守祐紀の城址なり

観音堂　大同元年の草創と云ハ天正二年滝川一益兵火ニ付て今ハ亡

中縄　沓怒　慶長己巳の古記ニ元和二年丙辰城主の此村を置年貢敏

亮の地　この村より西南の方ハ岩塔嶽あり

椋本　中縄の南の方ニ椋本ハ往来の大路ハ安濃郡ハ竜出椋本ハ安濃郡なり
ハ竜ハ鈴鹿郡ハ菅此辺より西の方ハ往来ハ

村中ハ江寺と云る寺の尾ハ大なる椋の木あり　里の名ハ小なり

宇渕城　椋本東西の野中ハ宇渕城ハ菅城郭関所ハ

高野尾　舊鈴尾　其右ハ此村ハ天王の社あり　紀ハ本椋本詳

豊久野　尊ハ号ハ中ハ尾と云ハ素盞嗚

恵日堂記ニ云雄略帝の御時丹波国ニ豊受大
神を勢州ハ遷し奉る時鈴鹿の神戸ニ此野ニ祠宮を建り
体ハ七年ハ御跡ハ遷し奉る中ハ乳母とも
其ハ乳母ハ往古ハ一里ハ

錦掛松　高野尾の東の曠野ニ丈年久しき一株の松あり是郡第

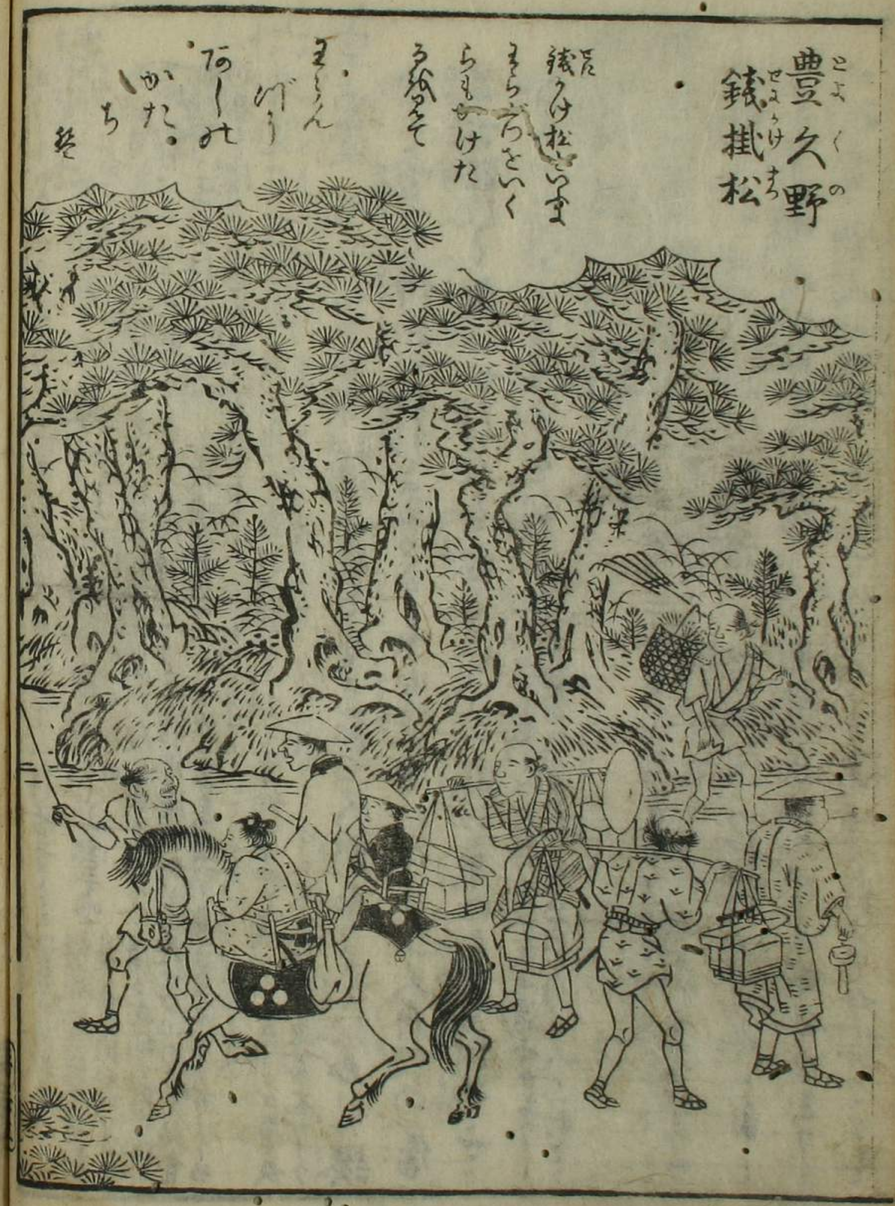
うるまや
ゆきの川
ゆきの宮

関の追分
東海道
泰宮道

いふ古神宮紀宮の御跡をうしなひぞるるとて老て松のを植うたまい人々宮に来りて
て小祠もあり又紙小祠を立て松の枝ゐ殘をうけて来穀乃
古神宮を遥拝し御供料をうけて来穀乃
さうへと祈まつりの所ゐ殘掛松といふ。又伊勢國氏郡肖圖帳殘
篇曰豊國野 神霊者豊斟渟尊之社間出食。足を以て桜ぢるゐ
苟此野ゐ豊斟渟尊の社のうせ所其跡へ松を
植て殘掛松とぬりいふ 両説の内図帳の方を味あり 今の往来のるる
洞説老人殘掛松の一説あり明應七年三月の御優の文より 一身田山内 粉川
の外ゐ家あて其遥うてゐ繋らるれを紀ふとまるゐ 繁節調るるゐ 其ゐ人

野崎 この村舊い山田井也 和名抄に山田井とあり文々ゐ延喜式神名帳ゐ書ある
神社とあるい即山田井東出の御厨八王子と云い足之
此里今操射 掛殘の居多 南方記傳ゐ南朝正平廿四年小畠内大臣顯能ゐ伊勢國ゐ合戦して
土岐の百塚 むま塚とも云 ゐ伊勢國ゐ合戦して
田村西の入口一町斗西の畠の中往来の大路のふりゐ塚あり むま塚又云 伊尼ゐ跡の塚とも云
南とだむの本ゐ紙ゐ入れ 入うり○古伝大脳ゐ虚説ゐ窪田ゐて右馬頭ゐ大脳ゐ
うりゐる人ゐ馬塚の説もあるべきゐ
窪田 此村の内馬場とゐる所の南の田地の字ゐ政所あるゐ○東脳ゐ
三年の伝法文ゐ窪田の庭地所の田地ゐ家司廉元とあるとゐれがりと政所の南村り

あるゐ文治ゐ家のゐ此南の山際ゐ苟生者ゐ祥善寺と云伽藍の跡あり
光明山安養寺 本尊阿弥陀佛 紀基 十王堂あり 往苟伽藍地にて紀
本願寺佛通禪師再興して其後焼亡ゐ 基善薩の用基也
て今跡ゐ見ゐとも其説のゐりて生ゐ言備但抜せり○一説佛通往師を光明ゐ
郡明野ゐ居ゐ住ゐり養中ゐ往明の寄ゐ様ゐ往宮ゐ手清の堂ゐ堂湯を吾しゐ
汚穢を濯しゐ其因緒ゐ寺もあり
六大院 六文院村ゐ後柏原天皇勅願六院を建て寺領百石と附せらるゐ慶長
本中安濃津恵日山観音寺人六院ともゐ稱しゐ今ゐ大宮院の墓ゐ不なり
空也堂 冷井ゐ西念寺 此村の東ゐ これを守る家三戸あり 今ゐ所ゐ
詰を唱へて往和の候ゐ生ゐ糸空也寺に同しゐ上人自作の像
甚古物にゐ銘にいたれを証とゐ又八ツ股の麻の扇と什物とせり
毎年十二月十二日法ゐを紀ふ 猛記あり 桑くい糸部 空也寺ゐ遠ゐ
坂部村 窪田村ゐ一身田の標石あり
倒換洲齋塚一宮 坂部村ゐ大脳を二丁計南東石の小塔あり 苟岐宮下りまと
時洲ゐして此川の洲にて水換しゐ 紀塔手換ゐ
ゐ洲ゐ換ゐ殿へ入らせ給ふと今ゐ畠と
ゐ洲ゐ換ゐ殿の跡ゐこの塔ゐ一町計東田の中ゐ塚あり
の松あり里人より塚とよびて塔詰ゐ


豊久野
錺掛松
錺掛松ばかりまちがいなくらもかけたうなぞ
まるんげつ
なのしみかたちなぞ

のこりうぶたをかけてたまるは拾うは
自然斬
絶全

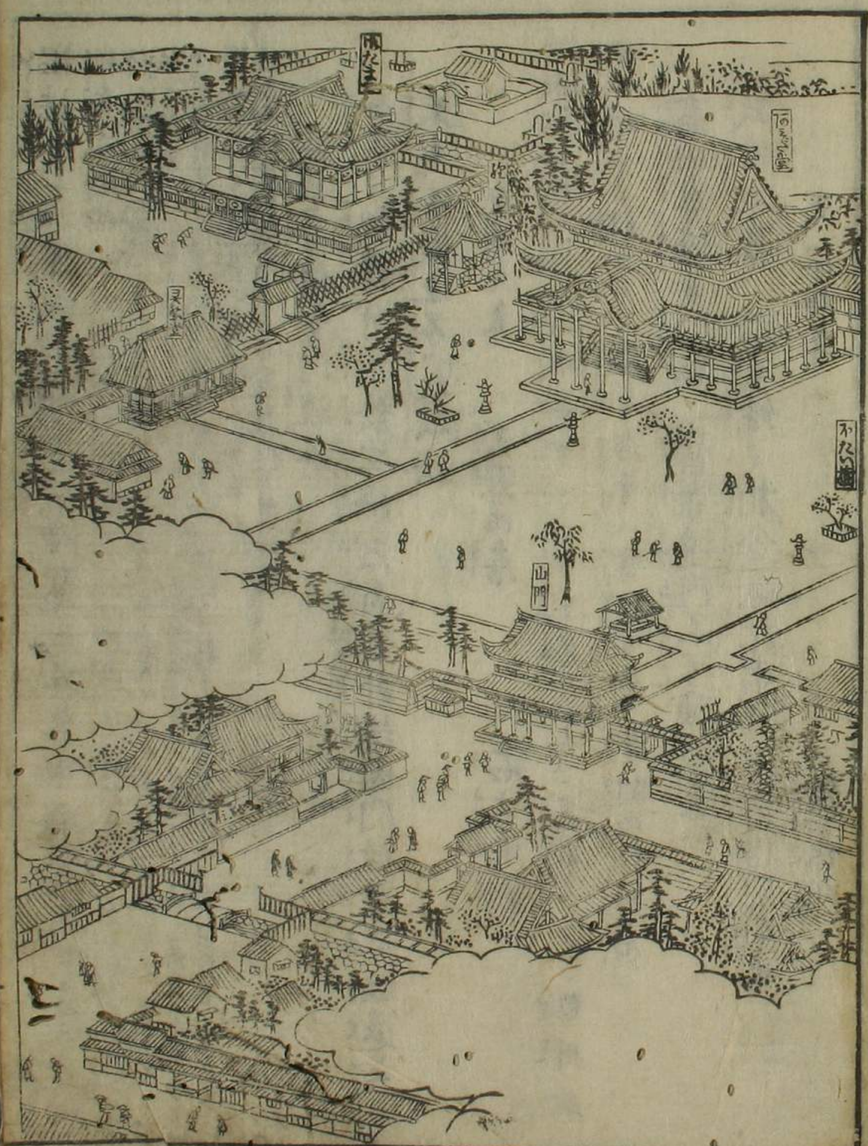
訛り橋うり二町いがゝ葉屋村の西の入に小の宮よりある事あり田の中に森あり
（元亮注田八郷の一の宮うて神名帳竜蟄郡事忌社とも是なり考
母の額う春日とあるゝ後世の
謬なり〳〵右彩川氏事忌考に委し

一身田高田山専修寺　下野流一向宗の本山にて本堂九四間四面

祖師を安置を傳ふ十八間四面の堂ハ阿弥陀如来也（すべて御浄檀金善光寺同）

高田とゝもに下野国ふ、ある系の名なり往昔芸佛上人とヤ
ゝハ下野国の産にて国勢をもてしんゝ〳〵深く親鸞上人を
帰依し剃髪して真佛とゝ唯授一人の口決を上人ふ得て一向専念
専念の旨を弘め佛寺と創立し高田専修寺とゝり芸佛上人
より八代ハ下野国にあり多ぐ第九代大僧都法印真恵ハ定顕
上人の芸弟にして中国佛法の大願を記し加賀越前近江等と
経歴して伊勢国ふもり先皆くハを化度し初ハ朝明郡大矢
智村光明寺に居し其後三重郡小松村中山とゝ石に寺院を
建立して移住せらる此ふ竜蟄郡黒田村哲言祐とゝふ者急ゝ

一身田
高田山
専修寺



其二

招請ヤて一身田に移ゝる干時寛正五年甲申上人卅一歳

親鸞之由緒ゝ（…）て昔親鸞聖人未宮の時此地を入江の磯ゝ（…）

（…）

下野國高田専修寺を伊勢國津藤堂邸一則田に移し終に是より一身田を本寺とし

野州高田を高基の霊地として掛所ゝて宣有故下置如左

後土御門院勅願所ゝて宣有故下置如左

高田専修寺門流事

此先ゝ相續可被致甚深之旨

天気不候也是之以状

文明九年　　右大弁判

玄恵法房

又信長公勢見死入の始南寺十二世堯恵上人と基睦ゝて勢州平

均の謀を談せらる依之南寺へ書送る不の禁制の扎如左

高田専修寺門跡　　當寺境内不可陣取事

放火之事　　右之條ゝ於今遠犯者可為厳科者也

天正四年　　信長判

此村の名称一身田と云ふの三代実録元慶三年丙寅六月勅参可国番匠郎荒廃田

一百町賜畝之内親王一身田と云ふ（…）

（…）

二軒茶屋　本郷村の○中野　大乃己所村

大乃己所神社　中世の森の中ゝ　式外の社なり　今は茅葺女大明神と称せり　獅子頭一口

大都田　上浪下津の町つゞきの小の入口也　古名を小丹浦又雄丹浦と云東南海湾

小丹浦　鳴呼見の浦なり　順徳院之御制歌

（…）

（…）

塩釜明神　塩竈と云ふ不ゝ延喜式神名帳安濃郡小丹神社

（…）

詳也

伊勢参宮名所圖會巻之二終